



Title	力、利益、そして回転：King Johnと地動説
Author(s)	中村, 未樹
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2001, 25, p. 73-89
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99251
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

力、利益、そして回転—*King John* と地動説—

中 村 未 樹

1595年8月、1人の數学者が死んだ。その名は Thomas Digges。彼は論文“*A Perfit Description of the Caelestial Orbis*”(1576)においてコペルニクスの『天球回転論』(1543)の部分的英訳を提供し、その地動説を擁護した人物である。そういえば、ちょうど同じ頃執筆された Shakespeare の *King John* においても、地球の運動を語った箇所がある。¹ 地動説という新理論を接点とした、數学者と劇作家の奇妙な出会い—この事件は、*King John* を新たに読み直すための糸口となるはずである。はたして、*King John* と地動説はどのように交錯するのだろうか。その解明において、重要な手がかりを与える参考人として Digges が登場することになるであろう。本稿では、地動説との関連から、*King John* における権力構造および権力学の分析を行う。

Ⅰ

コペルニクスの地動説は、元々、平面的な認識から生み出されたものであった。彼は従来の地球中心の天体構造に、別の中心(太陽)が潜んでいることに気づいたのである。もし、地球から太陽へと視点を移動して、後者を中心とした場合、より整然とした天体図になるにちがいない—こうした信念から、コペルニクスは地球の脱中心化を試みることになったのである。

16世紀の英國に、このような“the shift of vision”(Kuhn 116)を迫る新説が

与えた当惑は大きかったにちがいない。実際、知識人の多くが、反動的に天動説の再確認に努めることとなる。彼らにとって、地球を中心である理由は “not needful here to be rehearsed” (Blundeville 181) であり、この事実を疑うこととは愚かさの証とさえされたのである。こうした知的環境の束縛がいかに強力なものであったかは、Robert Record の *The Castle of Knowledge* (1556) における議論を参照することで明らかになる。そこでは、学生が教師に天動説への疑惑を打ち明けている。“Yet sometime it chaunceth, that the opinion most generally receaued, is not moste true.” (164) 一方、教師もそれに同調するかのようにコペルニクスの学識を誉めたたえさえするが、地動説の理解には深い知識が必要であるとして学生に釘を刺す。果たして、学生は自らを戒めるかのように、地動説を “vaine phantasies” (165) と呼んで議論を打ち切ってしまうのである。コペルニクスの新理論が彼らに垣間見せたのは「幻想」の情景だったのであり、二人はその手前で足をすくめてしまうのである。

こうして「排除」²されていた「幻想」を回復しようとした人物が、數学者 Digges であった。Digges は次のように述べている。

[B]ecause the world hath so longe a tyme bin carried with an opinion of the earths stabilitye ... I haue thought good out of *Copernicus* to geve a taste of the reasons ... that sutch as are not able with *Geometricall* eyes to bethoule the secrete perfection of *Copernicus Theoricke*, maye yet ... not rashly to condempne for phantasticall so auncient doctrine reuiued, and by *Copernicus* so demonstratiuely apporoued. (強調 Digges)

コペルニクスが提示した “phantasticall” な光景を凝視し、正当に評価するためには、“*Geometricall eyes*” が不可欠なのである。ここで、「幾何学的な目」が当時のヨーロッパを席巻していた幾何学文化と観察主義の創造的睦み合いによって形成されたものであることを強調しておかねばならない。16世紀においては、“the growing tendency to geometrise or mathematise a problem” (Butterfield 14) が顕著であった。構造、そしてその要素の相互連関に着目するトポロジカルな洞察は、この風潮の中で培われていくことになる。天

体が「どの部分においても、他の諸部分と宇宙全体の混乱を引き起こさずには、何ものも決して移しえないほどに結合されている」(高橋 175-76) という事実を踏まえてこそ、視点の移動は可能となるのだ。また、Richard Foster Jones によれば、16世紀以降、実際の観察による証明が科学において重要な役割を占めることになる(16)。Digges の研究を特徴づけているのも、“observation”へのこだわりなのであり、彼は観察による地動説の証明を試みてもいた(Johnson and Larkey 99, 95)。幾何学的認識に裏打ちされた観察の視点を、Digges はコペルニクスと密かに (“secret”) 共有していたのである。

Shakespeare が *King John* において試みたのは、この「幾何学的な目」を援用して政治を語るという「いたずら」なのであろう。彼の「いたずら」を、私は積極的に評価していくつもりである。なぜなら、Shakespeare は数学者 Digges の先に進むことになるのだから。

II

それでは、*King John* における政治の状況を「幾何学的な目」を通して観察していくことしよう。冒頭において、劇世界の権力構造を揺るがす事件が発生する。それは、“right royal sovereign” (1.1.15) としての Arthur の登場である。彼は John にかわる権力構造の新たな中心として浮上するのだ。それを可能にするのは、John から Arthur へと視点を移動させた Arthur の援助者フランス王 Philip である。彼は長子相続という観点を導入することによって (2.1.104-06)、John を王位篡奪者とみなし、その脱中心化を図る。こうして、John と Arthur という二つの中心/二人の王が対することになる。劇における政治の問題は、“a division of power into two centers” (Blanpied 98)、そしてそれに伴う構造の再編成というトポジカルな問題として即座に提出されるのである。

二人の王をめぐって以降のアクションは展開される。2幕1場における王たちと Angiers の市民とのやりとりを確認しておこう。そこでは、Angiers の所

有権に関する争いが、John と Arthur のどちらが英國王かを決定する争いへと横滑りしていく。その判定者となるのが Angiers の城壁に立つ市民である。

Citizen In brief, we are the King of England's subjects ;

From him and in his right we hold this town.

King John Acknowledge then the king, and let me in.

Citizen That can we not, but he that proves the king,

To him will we prove loyal. (267-71)

市民は、王たちを自明なものとしては受け入れず、彼らに「証明」を求める。証明にこだわる市民は観察主義の忠実な実践者なのだ。ここで、“city's eye” (215) とあるように、城門が「目」として隠喩的処理を事前に施されていたことも忘れてはならない。

市民を前に、John と Arthur の代理者 Philip は互いに見栄を切り、武力を競い合う。the Bastard が適切に描写しているように、彼らは巧みな演技でもって “theatre” (375) にいる無関心な観客たちを引きつけなければいけない。

“[I]ndustrious” (376) に自己演出していくことが王たちの証明手段なのである。“[H]e that proves the king' will be he who plays it best” (9) と論ずる David Scott Kastan はこの事実を正確に見抜いている。

結局、「英國王」の決定は市民による和平の斡旋によって “undetermined” (355) のまま遅延される。だが、ここで気になるのは、市民が漏らす “[k]inged of our fears” (371) という言葉である。この謎めいた、市民を支配する「恐怖」を一体私たちはどのように理解すればよいのだろうか。一見局所的な mood に見えるこの「恐怖」は、後に劇世界を普遍的に覆うことになるのである。仮に、“[o]ur fears resolved / Be by some certain king” (371-72) という市民の言葉を手がかりにするならば、この現象は王が二人存在するという状況と関連があるはずだ。比喩的に語るならば、二人の王を持つ権力構造とは「病気」なのであり、おそらくその症状として「恐怖」は位置づけられるだろう。そして、この劇が<政体-王体>の analogy を病気の image において執拗に語り直していた理由もこの観点から把握できるにちがいない。この点

については、第IV節における John と Arthur の相互連関の分析の過程で、詳しく論じていくことにする。

III

次に、劇の状況を立体的に把握するために、*King John* における権力学を解明してみよう。そのためには、まず John の臨終の際に王子 Henry が語る言葉に耳を傾けねばならない。“Even so must I run on, and even so stop.” (5.7.67) 彼は父王の劇における行動を走行、すなわち「運動」の一形態としてとらえている。実際、Shakespeare は John のみならず他の登場人物たちの行為すべてを力学的に解き明かすように、巧妙な仕掛けを用意しているのだ。その際彼が依拠した文脈として、ここではアリストテレス力学を設定しておく。17世紀にいたるまで、アリストテレス力学は論争されつつも支配的なものとしてなお影響力を保っており、コペルニクス (そして Digges) も力学的説明はアリストテレスに大きく依存していた (Butterfield 6)。以下の論においては、Shakespeare がいかにこの文脈から離れて近代力学の範疇に移行していくかを確認していくことになるだろう。

John の「王」としての運動を開始させたのは、王位篡奪という暴力である。彼の権利は “so forcibly withheld” (強調筆者; 1.1.18) されたものなのだ。暴力に由来する John の運動は、アリストテレスに従えば、“violent motion” ということになる。この「強制運動」に関しては、Digges の解説を参照しよう。“[S]utche motions wherein force and violence is vsed, muste needs bee dissolued and cannot be of longe continuance.” (13) 強制運動は長くは続かない——王子 Henry が “stay” (持続: 5.7.68)³について嘆かねばならない所以がここで明らかになる。結果的に、John の課題は、いかに自らの運動を持続させせるかということになる。

John の運動に大きく関与しているのが母親の Eleanor である。彼女は絶えず息子の傍らにいて入れ知恵を続ける。この母子のあまりに密接な関係性は

どのように解釈すればよいたどうか。ここで、強制運動が持続するには、その物体に接触する外的な原動体 (mover) の不斷の働きかけが必要である (Butterfield 3-4) という事実を考慮するならば、Eleanor は John の原動体の役割を果たしていると言えるだろう。彼女は、舞台において繰り返される “whispers” (1.1.31) という働きかけによって John を動かし続けるのだ。フランスの使者 Chatillon は、こうした John と Eleanor の特殊な関係性を適切に描写している。 “With him [John] along is come the mother-queen, / An Atc stirring him to blood and strife.” (強調筆者; 2.1.62-63) 王を動かす Eleanor の政界における「力」は、結果的に強大なものとなる。そういえば、そもそも息子の王位継承のために暗躍した人物こそ彼女であったことを思い返さねばならない。先王 Richard は後継者として甥 Arthur を指名したが、Eleanor はその遺言 (will) を変えさせたのである (Beaurline Notes 63)。Eleanor という外力によって、長子相続から兄弟相続へと直系継承がねじ曲げられたのだ。

Eleanor をはじめとする劇の女性たちは、王権、そして継承をめぐる運動に関わる「力」として働くことになる。⁴ ここでは、Lady Falconbridge と Constance の場合を確認しておこう。前者の先王 Richard との密通、そして the Bastard の出産が、1幕1場における Falconbridge 家の相続争いの根因となる。この論争が王家における相続問題の変奏であることは言うまでもない。そして、両者が共通して奏でる tenor は、女性の継承への介入である。

Robert Shall then my father's will be of no force
To dispossess that child which is not his?
Bastard Of no more force to dispossess me, sir,
Than was his will to get me, as I think. (130-33)

妻の浮気という障害物 (“the hazards” 119) によって、実子 Robert を後継者にしようとする故 Falconbridge の意志/遺志は「力」を失してしまう。⁵ その結果、Falconbridge 家における継承は実子 Robert から the Bastard へと斜めに歪んでいく。ここで、the Bastard が何気なく語る “[s]omething above a little from the right” (170) という言葉が「斜線」(非嫡子を表す紋章記号) を示唆している。

ることも付記しておこう。

一方、息子の権利回復を図る Constance は、John の counterforce としてフランス王の運動を押し進める。彼女は特有の減らず口でもって Philip を叱咤し、“peace”（沈黙/和平）への徹底抗戦を訴えるのだ。だが、Arthur に力を貸す Philip の動機は、実は英國にかつて譲渡された領土の回復にある。つまり、Philip にとって Arthur は土地奪回の欲望を満たすという意味において「使用価値」（伊藤 22-23）を持つのであり、その実現のために支援を誓約していたのだ。こうした画策のうすまく中で、Arthur の無邪気さはより鮮明に浮かび上がってくる。“I am not worth this coil that's made for me.” (2.1.165) 彼の無垢とは自らの価値への無自覚さなのである。

最初の「衝突」（“power confronted power”；2.1.329-30）の後、John と Philip は市民の提案を受け入れて Blanche と Lewis の結婚を前提とした和平協定を結ぶ。こうして、“royal bargain” (3.1.235) という名の商取引が行われ、John は姫 Blanche、領地そして3万マルクを顧客 Philip に渡す(527-30)。資産家 John による “possession” (1.1.39) の大盤振舞と言えよう。結果的に、土地の入手により欲望の充足した Philip にとって、Arthur はその使用価値を失し、彼は誓約を破棄することになる。

このような王たちの運動を観測しているのが、the Bastard である。John の従者として戦争に参加した彼は、「斜線」のシニフィエという自らの立場もあいまって、劇世界を「斜めから」観察する。“[H]e is but a bastard to the time / That doth not smack of observation ...” (1.1.207-08)。「観察」は当世の流行なのであり、彼もまたその follower であるのだ。この観察者としての自意識が、彼の “both in and out of every complex situation” (Beaurline Introduction 33) という劇における特異な position を可能にするのである。では、the Bastard の観察結果はどのようなものだろうか。

Commodity, the bias of the world,
The world, who of itself is peised well,

Made to run even upon even ground,
Till this advantage, this vile-drawing bias,
This sway of motion, this Commodity,
Makes it take head from all indifference,
From all direction, purpose, course, intent. (2.1.574-80)

the Bastard はまさに地球 ([t]he world) の運動との analogy において政治の運動を語っている。その際に用いられるのが bowling の image である (Beaurline Notes 98)。すなわち、“bias”(重り) が地球という球の中心から外れた箇所に埋め込まれることによって、斜めの方向へのトルク(回転力) が発生し、地球は “even”(まっすぐ) ではなく “bias”(斜め) に回転する。これが地球の自転・公転運動となる。これと同様に、政治の世界においては、“commodity”(利益) が重りとして運動を支配し (sway of motion)、結果的に “purpose”(目的/ある地点への運動) は意図せぬ方向へ向かうことになる。Arthur を裏切って John に寝返る Philip は、この「利益」という “purpose-changer”(567) に行動を左右されていたのだ。そういえば “conversion”(Digges 10) という単語は、「回転」のみならず「変節」をも意味するではないか。

King John の権力学においては、「利益」が全ての運動を支配するものとして (“wins of all” 569) 君臨する。実際、先ほど検討した和平協定も、「利益」によって John と Philip の欲望が媒介されることで可能となつたのである。同盟による Arthur の孤立化を図る John、そして領土回復のコスト削減を目指す Philip は仲良く「利益」のもとに集うのだ。むろん、和平の斡旋者である市民もその中に加えねばならない。

the Bastard の観察から、政治における運動は人物たちの目的、意志 (intent) によるのではない、という事実が導き出される。“drawn”(584) という言葉が示唆するように、「利益」の支配する運動の中に彼らは「引きずりこまれて」いくのだ。Philip の行動はその一つのサンプルにすぎない。このように考へるならば、私たちはもはや人物たちに対して、不変の本性、本質などは期待しえなくなる。内省的な深みを見せず、あたふたと動く John は、こうし

た世界の典型的な創造物と言えよう。上野の「自分の行動の意味や結果を省察することはいっさいなく、その場の利益にしたがって流されていく」(182)という John に関するコメントはとても重要なものなのだ。そして、劇を特徴づける変節のオンパレードも、こうした観点から見るならば自然に受け入れられる。Philip、そして John の貴族たちの行為は、この「利益」による運動法則に合致するのである。よって、彼らの更なる裏切りを意地悪に期待する私たちは、あながち恣意的とは言えない。

こうして、議論は、物の本性と運動の目的性を重視するアリストテレス力学から、法則的に運動をとらえる近代力学の枠組みへと移行してきたことになる(小林 11-13)。このような通時的経過をドラマ化した Shakespeare の功績とは果たしてなんだろうか。それは、「重り」の導入によって地球の運動を力学的に説明したことである。幾何学マニアのコペルニクス(そして Digges)は地球の回転の力学的原因を突き止められなかった(Butterfield 29)。Shakespeare はまさに “bias” を加えることによってコペルニクスと Digges の purpose を別の方へと誘ったのである。

ここで、私たちは一つの障害に突き当たる。つまり、強制運動という観点から John の運動を記述するという試みは、王をも巻き込む「利益」による一律的な回転運動を目の当たりにして、挫折してしまうのだ。これは、方法論上の齟齬というよりも、劇の核心をなす重要な問題として扱うべきであろう。果たして、王(権)と「利益」は正確にはどのような関係性にあるのだろうか。この問題は、第V節において検討していくことにする。

IV

ここからは、Arthur へと視点をずらして権力構造の「病気」の実態を調査していく。その際、重要なヒントとなるのは、the Bastard が語る “John, to stop Arthur's title in the whole” (2.1.562) という言葉である。“whole” という語は “hole” を示唆している。Arthur (の権利) は “whole” に空いた “hole” な

のだ。もし、ピエール・スクリヤービンが言うように、「構造とは穴を組織化する一つの様式」(147) であるならば、John の権力構造「全体」の生成に Arthur という「穴」は大きく関与しているにちがいない。その解明の手がかりとして、Jacques Lacan の議論を参考にする。Lacan は精神病の発生をトポロジカルに説明している。精神病の根因となるのは、「父の名前」の排除であり、これによって主体の象徴的世界に穴が形成される。排除された「父の名前」は「幻想」となり、この穴を補填するために回帰する。結果的に主体は恐怖という症状に陥り、精神病が始まる (*Écrits* 205-06; *SIII* 13)。Lacan の洞察を Digges の「幾何学的な目」に重ね合わせることで、Shakespeare がいかに劇世界を襲う「幻想」を凝視していくかが確認されるであろう。

John の権力構造は、Arthur という本来の王／国家の首長、つまり「父」を排除することによって成立している。そのため、John は排除によって出来た穴を覆い隠し、人目につかないよう処理しなければならない。しかし、John の試みは、貴族 Pembroke によってはからずも暴露されてしまう。

As patches set upon a little breach
 Discredit more in hiding of the fault
 Than did the fault before it was so patched. (4.2.32-34)

王位簒奪という「過失」によって空いた「小さな裂け目」を覆い隠そうとしても、かえって目だってしまう--これが Pembroke の皮肉が伝える教訓である。穴は完全には塞ぎきれないのだ。⁶ ここで彼が暗示しているのは Arthur に他ならず、貴族たちは揃って Arthur の釈放を要求することになる。皆の視線は、John の思惑とは裏腹に「小さな Arthur という対象」(objet petit Arthur) へと向かっていくのだ。

この場面以降、John と家臣の関係は大きく変化していく。John の再一戴冠式も貴族たちには “troublesome” (19) でしかない。彼らは John の自己演出に冷めた視線しか投げかけないのだ。演技の反復は、“wasteful and ridiculous excess” (16) であり、John の価値を高めることもなくインフレ的に処理されてしまうのである。こうして、貴族たちの信頼回復（契約更新）を図る John

の営業は失敗してしまう。また、腹心 Hubert さえも、Arthur 暗殺という John との契約を破棄してしまう。“I will not touch thine [Arthur's] eye / For all the treasure that thine uncle owes.” (4.1.121-22) Hubert は John の possession よりも Arthur への愛情を選ぶ。金銭で成立する以外の人間関係がここで登場するのだ。劇の権力学、つまり「利益」に基づく運動体系において、この事件は *anomaly* となって人物たちの動きに微妙な影響をおよぼすことになる。

果たして、排除されていた Arthur は幻想となって回帰する。Bastard は世間の様子をこう報告している。“I find the people strangely fantasied... / Not knowing what they fear, but full of fear.” (4.2.144-46) Arthur の噂をする人々は、奇妙な幻想にとりつかれ、得体の知れない恐怖を覚えるのだ。この症状は Angier の市民を想起させずにはおかしい。また、John 自身の口からも “fear” (42) という言葉が発せられる。そこに Arthur の存在が関与していることは、Pembroke のその後の返答に示唆されている。こうして、王とその権力構造はともに恐怖による possession (憑依) に脅かされていく。

Shakespeare は Arthur の回帰を執拗に描いていく。実際、彼にとって Arthur は手放しがたい人物だったのであろう。彼の死をめぐる騒動はこの事を十分に示唆している。Arthur は二度も蘇るのだ。⁷つまり、Arthur はなかなか死な(せ)ないのである。そして、その死後においても、彼は “symbolic debt” (Žižek 23) として劇世界に精算を要求することになる。彼が取り立てに向かうのはもちろん、営業不振にあえぐ John であり、それは死せる Arthur の復讐としての英国侵攻という形をとることになる。John の権力構造に空いた穴から、“strong matter of revolt” (3.4.167)、すなわち「反乱という臓」が噴出するのだ。政体の病はここにおいて表面化される。

それでは、英国侵攻の指導者 Lewis とその黒幕 Pandulph について確認しておこう。英仏両陣営を渡り歩いて謀略にいそしむローマ法王の全権大使 Pandulph が策士であることは言うまでもない。重要なのは、彼の策士としての特性を明らかにすることである。

All form is formless, order orderless,
Save what is opposite to England's love.

Therefore to arms! Be champion of our church.... (3.1.253-55)

Pandulph の言葉には、「形式」と「秩序」への飽くなきこだわりが窺える。彼は構造への関心を持った幾何学文化の申し子なのだ。彼が想定する形式とは、ローマ法王を頂点とした超国家型のものであり、それは必然的に John が志向する個別型の支配形式 (155-58) と矛盾する。教会と John — この二つの“supremacy” (156) は両立しえないのであり、Pandulph は John の至上権を押さえ込むためにフランスを利用するのである。

敗戦後弱気になった Philip を見限り、Pandulph はその息子 Lewis に目をつける。John の対抗馬として機能するのであれば誰でも良いのだ。このように変換さえ導入する急進的数学者 Pandulph に対して、Lewis は不信感を示す (3.4.144)。だが、そうした感情を抱きつつも彼をして英国侵攻を行わせるのは、その “gain” (141) への関心である。Lewis も利益による運動に身を任せているのだ。父よりも venture spirit に富む彼にとって、王位獲得は一種の game にすぎない。“Have I not here the best cards for the game / To win this easy match played for a crown?” (5.2.105-06) ギャンブラー Lewis の切り札となるのは、Blanche との結婚がもたらす英国王位継承権、John から離反した貴族たち、そして Arthur の死を盾とした大義名分である。結果的に、Arthur の使用価値はその死によって遂に実現することになる。

こうした周囲のあわただしい動きをよそに、John は勢いを失っていく。4 幕以降、John は自ら動くことはなく、代わりに the Bastard を使者として用いている。また、彼のお株であった “speed” も、今や Lewis の率いる仏軍に奪われている (4.2.113)。そして、失速しつつある John に致命的なダメージを与えるのが、原動体 Eleanor の死という事件であろう。母の死の報告を受けた John は思わずこう叫ぶ。“Withhold thy speed, dreadful Occasion!... What? Mother dead? / How wildly then walks my estate in France!” (124-27) 失速する John にとって、外界の体感速度は相対的に速くなるのだ。John の「めまい」

(“giddy” 130) はこの事実に由来する。また、原動体の喪失によって、“walk”はおぼつかなくなり、運動の持続はもはや見込めなくなる。実際、終幕での John は動くこともできず、輿によこたわったままとなるのである。

一方、the Bastard の運動には John とは対照的な変化が生じる。何よりも劇後半の the Bastard を特徴づけるのは、その “speed” (4.2.176, 5.7.50) である。the Bastard は John を後目に加速していくのだ。このような John と the Bastard の運動の推移を座標上において表すならばどうなるであろうか。仮に X 軸を劇の進行過程、Y 軸を速度とするならば、John の場合は右肩下がり、the Bastard の場合は右肩上がり (“[s]omething above a little from the right”) の斜線となるであろう。Andrien Bonjour が述べた “John’s career represents a falling curve, the Bastard’s career a rising curve” (270) という図式は、こうした力学的な観点からも証明されるのである。

V

フランスの侵略、そしてそれに呼応した内紛によって、John を中心とする権力構造は瓦解していく。Arthur という “hole” を起点として、権力構造全体が綻びだしていくのだ。その先に控えているのは、外敵のみならず臣下までもが英国王権をめぐって相争う世界、差異の失われた茫漠たる空間である。静的な階層秩序は、「利子」 (“interest” 4.3.147) に導かれる流動的、liquid な空間へと変貌していくのだ。この “vast confusion” (152) のさなかにおいて、the Bastard は位置感覚を失ってしまう。“I am amazed, methinks, and lose my way / Among the thorns and dangers of this world.” (140-41) 彼にとって、もはや身を寄せるべき中心は存在しない。“[T]he right, and truth of all this realm” (144) たる Arthur は死に、かといって John にも全面的には依拠しかねるのだから。彼は John に対する不信感を間接的に述べている (4.2.165-66, 5.1.43)。5幕6場において、the Bastard と Hubert が暗闇の中互いの存在を確かめあうという舞台上の演出は、こうした状況を比喩的に表したものなのである。

自らの位置、そして他人との関係性も把握しえないまま、人々は手探りで進むしかないのである。

John は貴族たちのみならず、the Bastard を引き留める力も失い始めている。王権の attraction (魅力/引力) は減少し、誰もが「利益」による運動の渦のなかに取り込まれていくのだ。仮に、Hubert の言葉 (5.6.23-27) が the Bastard に王権奪取を勧めるものであるという James L. Calderwood の見解を信用するならば (142-43)、the Bastard までもこの運動に吸引される可能性を潜在的に持つことになるのである。

こうした状況を踏まえるならば、Salisbury が王子 Henry に語る言葉の意義が明らかになる。 “[Y]ou are born / To set a form upon that indigest / Which he [John] hath left so shapeless and so rude.” (5.7.25-27) この一節に “displacement of the political by the formal” (31) を看取する Barbara Hodgdon に、私は同意する。King John における政治の問題は、まぎれもなく「形式」の問題であるのだ。ここまで進められてきたトポロジカルな議論の有効性はここにおいて確証される。そして、王子に託された課題とは、「利益」による運動の渦、“indigest” を「形式」の中に「力」づくり押し込むことなのである。

John の死 (運動停止) によって、王権は嫡子 Henry へと受け継がれ、かつて Eleanor によって無効化された長子相続が再開することになる。Henry の補佐役となった the Bastard は直系／直線 (lineal)への回帰を強調する (5.7.101-02)。だが、この場における女性たちの不在は、いかなる意味をもつんだろうか。Eleanor と Constance は既にその死が報告され、Henry の母親は登場することもない。Ⅲ節で論じた女性と継承との強い結びつきを考慮するならば、このような設定は男性の意志／遺志を保護するための巧妙なお膳立てであるといえよう。男性たちにとって、この現象は集団セラピーとでもいべき架空の癒しにほかならない。

新しい王を擁した英国に関して、the Bastard はその予想図を提出する。“Nought shall make us rue, / If England to itself do rest but true.” (5.7.117-18) 英国安泰のためには国内の調和、つまり臣下たちが “subject enemies” (4.2.171)

という自家撞着のそぶりを見せずに服従することが肝心なのである。このあまりに理想的な条件節は、どのように受容すべきなのだろうか。それを didactic に、王国の *propaganda* としてとるか、それとも苦し紛れの切願としてとるかは読者に委ねられるのだ。

劇の終幕を見る限り、私は後者の立場をとらざるをえない。というのも、Henry に対して私たちは何を期待すればよいのだろうか。その幼い姿は、皆に利用された Arthur を想起させずにはおかしい。実際、Henry は涙にくれるのみで積極的に自己演出していくことさえ能わない。さらに、彼の側に侍る貴族たちの存在が、私たちの不安を増殖させる。彼らはフランス側から寝返つて John の下に戻る。その回転／変節は止まらないのである。帰順した彼らを “you stars that move in your right spheres” (5.7.74) と呼び、あたかも王の引力が復活したかのようにみせる the Bastard の言葉を私たちは信用することができない。貴族たちをして故国に向かわせたものはやはり「利益」にちがいないのだから。果たして、Henry は彼らを引きつけ、服従させる attraction を持つのだろうか。そして、その回転／変節をくい止めることができるのだろうか。王による “sway” (支配) は「利益」の “sway” (2.1.578) を制御しうるのか。あるいは、前者は後者を共約可能なものとして自らの統治戦略に導入することができるのだろうか。王権と「利益」—その不確かな連動をめぐつて、私たちの不安が醸成されていくのである。

註

- 1 本稿では、A. R. Braunmuller の見解にしたがって (15)、*King John* の制作年代を 1595-96 年頃とする。
- 2 「排除」については、Lacan の以下の説明を参照。 “[A] subject refuses access to his symbolic world to something that he has nevertheless experienced...” (SIII 12).
- 3 *OED* stay sb³ 5.c.
- 4 例外として Blanche を挙げておかねばならない。彼女は叔父 John の意志を自らのものとし、抵抗せずにそこに身をゆだねていく。“My uncle’s will in this respect is mine.”

- (2.1.510) こうした Blanche の従順さは、後になって男性たちの相対する「力」によって分断 (dismember) されてしまうという危機を引き起こすことになる (3.1.328-30)。
- 5 ここで気になるのは、上の引用に潜んだもう一つの “will” (133)、つまり「性欲」である。故 Falconbridge の性欲の欠如を皮肉る the Bastard の胸のうちには、実父 Richard の浮気にも手を染める過剰な性欲が肯定的に対置されているのだろう。Howard と Rackin は浮気によって Richard の英雄像が破壊されると述べているが (126)、正確には英雄の必然的性質としての性欲が明らかになったと言うべきである。the Bastard も武力と性欲の比例関係を十分認識している。“He that perfors robs lions of their hearts / May easily win a woman’s.” (268-69)
- 6 排除に由来する「穴」の特性について、Serge Leclaire は次のように述べている。
- If we imagine experience to be a sort of tissue, that is, taking the word literally, like a piece of cloth made of intersecting threads ... foreclusion would be a sort of ‘original hole,’ never capable of finding its own substance again since it had never been anything other than ‘hole-substance’; this hole can be filled, but never more than imperfectly, only by a ‘patch’....
- (強調 Leclaire ; qtd. in Lacan *Language* 98)。
- 7 4幕2場において、Hubert は Arthur の死を報告する。しかし、次の場では Arthur が登場し、事故死する。この事実を知らない Hubert は Arthur の生存を貴族たちに告げる。

参考文献

- Beaurline, L. A. Introduction. *King John*. By William Shakespeare. Ed. L. A. Beaurline. Cambridge : Cambridge UP, 1990. 1-57.
- . Notes. *King John*. By William Shakespeare. Ed. L. A. Beaurline. Cambridge : Cambridge UP, 1990.
- Blanpied, John W. *Time and the Artist in Shakespeare’s English Histories*. Newark : U of Delaware P, 1983.
- Blundeville, M. *His Exercises Containing Sixe Treatises*. London, 1594. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.
- Bonjour, Andrien. “The Road to Swinstead Abbey: A Study of the Sense and Structure of *King John*.” *ELH* 18 (1951): 253-74.
- Braunmuller, A. R. Introduction. *King John*. By William Shakespeare. Ed. A. L. Braunmuller. Oxford : Oxford UP, 1994.
- Butterfield, H. *The Origins of Modern Science 1300-1800*. London : G. Bell and Sons, 1950.

- Calderwood, James L. "Commodity and Honour in *King John*." *King John and Henry VIII: Critical Essays*. Ed. Frances A. Shirley. NY: Garland, 1988. 127-44.
- Digges, Thomas. "A Perfit Description of the Caelestial Orbes." *A Prognostication Everlastinge Corrected and Augmented by Thomas Digges*. Leonard Digges. London, 1576. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1975. N pag.
- Hodgdon, Barbara. *The End Crowns All: Closure and Contradiction in Shakespeare's History*. Princeton: Princeton UP, 1991.
- Howard, Jean E. and Phyllis Rackin. *Engendering a Nation: A Feminist Account of Shakespeare's English Histories*. London: Routledge, 1997.
- 伊藤 誠. 『資本主義経済の理論』 岩波書店、1989.
- Johnson, Francis R. and Sanford V. Larkey. "Thomas Digges, the Copernican System, and the Idea of the Infinity of the Universe in 1576." *Huntington Library Bulletin* 5 (1934): 69-117.
- Jones, Richard Foster. *Ancients and Moderns: A Study of the Rise of Scientific Movement in Seventeenth-Century England*. St. Louis: Washington UP, 1961.
- Kastan, David Scott. "'To Set a Form upon that Indigest': Shakespeare's Fictions of History." *Comparative Drama* 17 (1983): 1-15.
- 小林道夫. 『科学哲学』 産業図書、1996.
- Kuhn, Thomas S. *The Structure of Scientific Revolution*. 2nd ed. Chicago: U of Chicago P, 1970.
- Lacan, Jacques. *Écrits: A Selection*. Trans. Alan Sheridan. London: Tavistock, 1977.
- . *The Language of the Self: The Function of Language in Psychoanalysis*. Trans. Anthony Wilden. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1968.
- . *The Seminar of Jacques Lacan Book III 1955-1956: The Psychoses. (SIII)* Ed. Jacques-Alain Miller. Trans. Russel Grigg. NY: Routledge, 1993.
- Record, Robert. *The Castle of Knowledge*. London, 1556. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1975.
- スクリヤービン, ピエール. 「大文字の他者の諸相」 鈴木國文訳. 『意味の彼方へ — ラカンの治療学—』 新宮一成編. 金剛出版, 1996.
- Shakespeare, William. *King John*. Ed. L.A. Beaurline. Cambridge: Cambridge UP, 1990.
- 高橋憲一訳 『コペルニクス・天球回転論』 みすず書房、1993.
- 上野美子 「『ジョン王』あるいは歴史の解体」 『季刊文学』 2 (91): 174-85.
- Žižek, Slavoj. *Looking Awry: An Introduction to Jacques Lacan through Popular Culture*. London: The Mit P, 1992.